

恋姫†OROCHI 外史降臨

日立インスパイアザネクス人@妄想厨

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔王・遠呂智の封印が解かれた。仙界を逃れた遠呂智が向かう先は外史の世界。圧倒的な力を誇る遠呂智は脆弱な世界が耐え切れぬと知り世界を歪めた。かくして三国志演義と戦国絵巻の外史は混ざり合う。

全ては己が願望が為……。

蜀ルート：ふと一刀が目を覚ますと森の中。訳が分からず彷徨つていると妖魔に襲われている少女に出会した。

一昔前ににじファンで恋姫無双×無双OROCHIをしてました
が閉鎖したため停止。戦国恋姫が発売されたためまたやることにしました。書くのが遅いですが頑張ります。

目

次

ストーリーモード：蜀

蜀 : prologue

刀香の誓い

楼桑村撤退戦 前編

楼桑村撤退戦 中編

楼桑村撤退戦 後編

陣地会話 佐々成政

陣地会話 蜂須賀正勝

60 51 37 28 18 8 1

ストーリーモード：蜀

蜀：prologue

北郷一刀はわけがわからなかつた。

その日は聖フランチエスカ学園の剣道部に寄つて不動先輩と一試合交えて汗を流し、武道場の掃除を終え剣道部と別れを告げベッドまで重い体を引きずつて現実世界からフェードアウト——したはずだつたのだが。

何時間寝たのかわからないが一刀は柔らかな明かりで目を覚ました。

清々しい朝だな、と一刀は寝ぼけ眼で起き上がる。

「…………」

軽く背伸びをすると背骨がぽきぽきと小気味良い音がした。何故か妙に体の節々が痛い。

しかし、やけに清々しい。

鼻から肺へ送られる空気は室内の籠もつた空気ではなくすうつと透るような新鮮な空気だ。もしや窓を開けっぱなしで寝るという不注意を起こしてしまつたのか。ぼーっとした頭でそう考えながら目を開けると、

「…………」

壁が、無い。

ベッドも屋根も壁も無い。

というか外だ。

「…………はい？」

おかしい。確かに自分は部屋でベッドで眠つたはずだ。こんな鬱蒼とした森の中で野宿した覚えはない。

こんな木々が生い茂る場所は知らない。空模様が曇りなのか夕方近いのか数m先も見通せないし、道と言えば獸道。本当にここは何処なんだ？

「……下手に動き回ると遭難の危険性が高くなるって言つてたよな。でも救助隊が来ること前提の話なわけで——」

その時、

「きやあああ——ツ!!」

「何だつ?!」

一刀は肩をすくめて辺りを見回した。やはり木々に囲まれて先が見えない。

声が聞こえたということはこの近くに人が居るということ。遭難予備軍の一刀がやるべきことは人を探すこと。しかし、この声は明らかに叫び声だ。

君子危うきに近寄らず。この場合はそれが賢明な判断のはずだ。
(けど)

あの絹を裂くような女性の声が耳から消えてくれない。

あの声の主がたつた今悲惨な目に遭つてているのが脳裏に浮かび上がる。

「黙つてられるか!」

一刀は頬を張つて奮い立たせ、声が聞こえた方へ走り出す。



目的の場所はさほど遠くなかった。

女性の声がした方へ走つて行くとまた悲鳴が響いてきた。咄嗟に草むらに身を隠して様子を伺うと、見えた。一刀と同い年ぐらいの桃色髪の少女が壁を背に追い詰められる姿。彼女の周囲には血をまき散らして倒れ伏す数人の男達。それと、一刀の居る位置から見えないが、少女を取り囮むように多数人の気配を感じた。

一刀の死角から低温の野太い声が少女に向けて浴びせられる。

「随分と手間を掛けさせてくれたなあ！　あの化け物女が居なけれどやただの女だ！」

「あ、愛紗ちゃん達に何をしたんですか!?」

つるぎを構える少女が声を震わせて叫ぶと野太い声の主が大きく鼻で嗤つた。周囲も呼応してゲラゲラと下品に騒いだ。

「俺が知るかよ。今頃呉の狗共に蹴散らされてる頃だろうなあ！」

「！ 軍が不自然に分かれたのは、あなた達が……つ」

「さあな。知りたきや俺らを殺してみろ」

少女一人、相手にならないと判断し悠然と歩み寄る姿に――一刀は身を強張らせる。

それは真つ当な人間ではなかつた。

血の気が無く鱗のような肌を晒し、爬虫類を連想させるそれは少女より一回り大きな体躯を広げて挑発する。――たとえ剣先を向けているのが少女であつても、異形達の余裕は崩れなかつた。

相対する少女は、

「……」

剣を構えながらも、その震えを隠しきれなかつた。

信頼する仲間は居ない不安。

自身も絶体絶命の危機。

助かる可能性は――數の影に隠れて誰にも知られていない一刀の存在。しかし望みは薄すぎる。そもそも一刀は多少剣術を習つても、本気の喧嘩もしたことが無いごく普通の高校生だ。あの中に躍り出ても瞬殺されて少女の周りに居る者と同じく土に還つてしまう。

十分に余興を楽しんだのか、進み出た化物の槍が少女の剣を払い去る。

「……死に損なつたにしろくたばつたにしろ、貴様が死ねばこの義勇軍も終わりだ。覚悟しろ!!」

「――私たちは負けない。わ、私と同じ志がある人たちが居る限り、愛紗ちゃん達があなた達なんかやつつけちやうんだから！」

啖呵を切つた。

絶望的な状況に立たされても、仲間が誰も居なくなつても、殺されかけていても。

この少女の瞳の炎は未だに消えない。

強い人だ。隠れて様子を窺っていた一刀は素直に感服し、
(俺は……)

何処からかギリッと軋む音がする。それは自身の奥歯から聞こえていて、

(俺は……!)

一刀は間違つたことはしていない。けれど、それがとても情けなく感じるのだ。

胆の据わつた少女の言葉は少年の心に深く突き刺さつた。だが、それは異形達をさらに苛立たせる。

「ちつ」

異形のリーダー格が無造作に槍を振るつた。

少女の体を狙つたのではなく、それは体を覆う衣服に向けてだ。

「つっ……え？　きやあ！」

呆気なく切り裂かれた衣装に少女は目を丸くして、あられも無い姿にされたと気づいた瞬間に蹲つて体を覆う。

「野槌様？」

「駄目だ駄目だ駄目だ!!　ただ殺すだけじゃ足りねえ!!」

野槌と呼ばれた異形の腕が少女の首を掴み引き上げた。

「か、はあ——」

「いいか？　貴様らには身の程を知つてもらわなければならぬ。二度と立ち上がらないように。妖魔様に歯向かわないように。人間は妖魔の奴隸くいものであると自覚するようにな！　徹底的に絶望しなけりやらねえんだよ！　こうなりや全員の慰み物に――痛う!?」

不意に野槌が顔を顰め、少女を壁に向けて投げつけた。遠目から見ていた一刀にはわからないが、恐らく爪を腕に突き立てたのだろう。

「げほつ、ごほつ！」

「貴様あ……！」

倒れ込んで咳き込む彼女の瞳は

一刀の瞳と重なつて、ゆっくりと細めた。

「やつちまえ！」

すぐさま無慈悲な命令が配下の妖魔に下された。
冷血な異形の刃が少女を突き立て――

「やめろオオオオオオオオオオオオオオオツ!!」

その瞬間。

異形の者達は一刀の存在に気づき、

ドシャッ!!! と。野槌が真上から落ちてきたものに押し潰された。

少女に槍を突き刺そうとしていた妖魔は背後から響いた水っぽい音に動きを止め、上官が潰されたのを目の当たりにした妖魔達も突然の出来事を理解するのに時間が掛かつた。

一部始終を見ていた一刀ですら呆然としていた。野槌をペしやんこにしたのは幾何学な模様が施された巨大な陶器だつた。少女が背にしている崖から落ちてきた、というわけではなく、突然一刀の視界の端から現れた。

さらに不可解な現象が起きる。

その落ちてきた陶器はインパクト時に粉々に碎け、中から青白い太極図が出てきてふよふよと浮遊していた。一刀は何となくその太極図が危険な物だと感じ、茂みから飛び出て妖魔を押しのけ少女に駆け寄つた。

「ごめん!」

「え? え?」

少女の碧眼が面白いぐらい丸くなつた。

急に危地へ飛び出して前触れもなく抱きついてきたのだから当然の反応だろう。少女の柔らかい感触にドキッとしながら一刀は少女を抱え込み、

直後、視界が白く輝き、甲高い音と弾けるような衝撃その身に受ける。

「ぐぎゃあ!!」

「ぶあ!!」

「ぐつー！」

数瞬の後、耳鳴りと目眩に苛まれながら、ビリビリと痺れる体を無理に起こした。振り向くと妖魔は誰も立つていなかつた。さつきの破裂で倒れ伏した者や腰を抜かした者、誰もが混乱しきつていた。

やがて妖魔の一人が声を荒げる。

「こ、こいつ何やりやがつたんだ!? 化物か!?

「逃げろ！ いや撤退だア！」

「ひえー！」

と、突然現れた一刀が起こしたものだと勘違いしたようで慌てふためきながら引いていく。

残された一刀と少女はしばし見つめ合つて、

「ぶつ、あはははは！」

思いつきり笑つた。

さつきまで優勢だつた妖魔達が、情けない声を出して逃げていく姿がとても滑稽で、時折思い出し笑いをしたり下手なモノマネをしたりして腹を抱えて笑う。

一頻り笑いあつた後、少女はふう、とため息をついた。

「助けてくれてありがとうございました。あの、怪我は……？」

一刀の怪我は本当に無い。精々じんじんと疼く程度のものだ。

「俺は大丈夫だよ。それより君の方が心配なんだけど……」

「はい？ ああ、ちよつと引っ搔いただけですから時間が経てば消える、は、ず……」

対して、少女の怪我は妖魔が槍で衣服を切り裂いた時にうつすらと出来たものだ。傷 자체は問題ないが、問題は今の恰好。腰下のスカートは若干擦れてボロつくなっているだけだが、上半身は下着ごとビリビリに破かれて衣服の意味を成していなかつた。詰まる所、丸出し。さらにたつた今まで自身も気づいてなかつた上、平気な顔で同年代の少年と談笑していたのだ。

少女の言葉を塞き止めたのはそれが原因。

きやん!? と可愛らしい悲鳴を上げて、顔を紅く染めさつと手で体を覆つた。

実を言うと一刀も気づいていたがあまりに平然としていたので指摘できずドギマギしながら相手をしていた。それが少女の天然ゆえの行動と知ると、一刀は顔を背けて自分の上着を渡す。やがてか細い声で礼の言葉を紡いで一刀の手から上着が離れた。

「そ、そうだ名前！　さつきまであれだつたからな。自己紹介もしてなかつた」

「そそそそうですねっ！　命の恩人ですし！」

本当は違うんだけどな、と心の中で呟いた。けど同時に、この少女が助かつて良かつたと緩やかに息を吐く。

「俺は北郷一刀。聖フランチエス力学園に通つてるごく普通の学生だよ」

「北郷さんかあ。私は劉備、字は玄徳。幽州涿郡涿県の樓桑村ろうそうそんで義勇軍を率いてるんだ。よろしくね♪」

「……………はい？」

義勇軍の桃色髪の少女、劉備玄徳との邂逅を皮切りに、一刀は幾多の英雄と共に数奇な運命に巻き込んでいく。

刀香の誓い

「でね、白蓮ちゃんの所に行く途中で大きな地震があつて、その後からあの妖魔達があちこちに現れたの。気づいたら聞いたことのない邑が出てきて白蓮ちゃんの所に着くまですつごく時間がかかつちやつたんだよ。あ、でも三河で食べたあまじょっぱいお団子は美味しかつたなあ」

劉備の義勇軍があるという楼桑村へ向かう道中、俺は劉備のこれまでの経緯を聞き逃さないように聞いていた。ちなみに劉備は今、素肌に俺の制服の上着を着てているだけの状態。劉備の名を聞いた時からタイムスリップをしたと確信したのだが、まさか彼の仁君・劉備玄徳が美少女で、しかもその劉備に彼シャツ的なことさせているのはものすごく恐れ多い気がしてならない。男女の差というか、劉備の持つ双丘は俺の上着の内包力を超えてしまい、前を止めようとした時ボタンが弾け飛んでしまったので仕方なく体を抱くように手を回していくそれがかなり色っぽく見えて超最高ですええい何を言っている俺。

彼女の話を聞く限り、俺はとんでもないことに巻き込まれているらしい。

単純にタイムスリップした時点でとんでもないことだが、この世界は俺の知る歴史と大きくかけ離れてしまっていた。

まずは劉備を始めとする多くの武将が女性であること。聞けば彼女の師に当たる盧植や学友の公孫賛も女性で、彼女の仲間で俺より年下の女の子が居るという。

それとこの世界の人達には姓・名・字の他にもう一つ、真名というその人の御靈を表す名がある。家族の様に近しい身内や本人が認めた相手以外が呼ぶことは許されない神聖なものらしい。さつきから劉備が話している『白蓮ちゃん』は公孫賛のことで、知らずにその名を口にした途端に突然劉備が怒氣で顔を赤くして斬りかかってきた。結局は未遂に終わり（腕を振り上げた時に劉備のでつかいものがさらけ出されて違う意味で真つ赤になつたため）、土下座して弁明したら許してくれたが……もし出会つたのが劉備じゃなかつたら正直ゾッ

とする。

そしてもう一つ、妖魔の存在だ。

こればかりはお手上げだつた。三国志にも三国志演義にも、妖魔なんて化けものは出てこない。劉備の話によれば、妖魔が出てきたのはつい最近らしく、出てくる以前は妖魔なんてただの夢物語で語られるものにすぎないものだつた。

ある日何処からともなく現れ人を襲い全てのものを略奪する。

行動は人間の賊と変わらないが、その目的は未だ定かではなく依然勢力を広げ続けているそうだ。

「色々あつて白蓮ちゃん達とははぐれちゃつたけど、愛紗ちゃん達と出会つて村に戻つて義勇軍を起こしたんだけど……」

そう言つた彼女の顔はみるみる暗くなつていく。愛紗という人達のことを考えているのだろうか。

会つて間もない俺が劉備に抱く印象は、天然でお人好し、それと優しい人。

あの時通りすがりに過ぎない俺を妖魔から隠そそうとするなんて真似、誰が出来ようか？

……俺の知る劉備玄徳とは異なるとは言え、やはり劉備の本質は変わらないようだ。

「……そういうえば、後どのくらいで樓桑村に着くんだ？ 結構歩いたと思うけど」

何でこんな時に気の利いた言葉一つ出てこないんだろうか。

「……、んなに暗いとどつちに向かつてるかわかなくなつちやうよね」

「不安になるようなこと言わないでくれよ」

「大丈夫大丈夫。地面は繋がつてゐるから」

「絶対迷つてるなこれ！ さつき居た所に戻つて助けを待つ方に一票！」

しかし劉備は俺の意見を聞き入れず、顔を真つ直ぐ前に向けてずんずん進む。話題が変わつて声色が明るい感じになつてはいたが、やはり不安は消え去つていないのでだろうか。

俺はそう考え足早になつた劉備の小さな背中を追つた。

その少女の顔が若干紅く染まつていたのに気付かなかつたのはご愛嬌というものだ。



似たような場所を何度か通り過ぎてしばらく。ようやく森を抜け出した俺達は人の営みの光を頼りに歩を進め、

「とおちや～く♪ それでは――樓桑村へようこそ♪」

満面の笑みを浮かべた劉備が声高に言つた。

劉備の歓迎とは裏腹に、村にはピリピリとした空気が漂つっていた。簡易的なテントが張られ、武器や兵糧を詰んだ荷馬車を屈強な男達が引いていたり、物見台から遠方の様子を窺つていたりと慌ただしい熱を帶びていた。

「あら？ 玄徳ちゃんじやないかつて、なんちゅうカツコしてんかい？」

「あっ、憲和おばさんただいま。村の方は大丈夫だつた？」

「そりやこっちのセリフさね！ まあ大事は無かつたんだが……ともかく村のことはあたしらでやつとくからさつさと着替えてきな！」

あ～れ～、と首襟を掴まれて引きずられていく劉備。……実は今のおばさんが裏で義勇軍を指揮してゐるんじやなかろーか？

そんなこんながあり俺は劉備の天幕の前に居た。ちなみに返つてきた上着がほのかな桃の花の香りを帶びていて超最高ですええい何を言つてゐる俺。

天幕には劉備の他に4人の男女が居る。外に居る俺には中の声はよく聞こえないが、恐らく戦果報告を受けているのだろう。

劉備の話によると、俺と出会う前に義勇軍を率いて妖魔との戦を起こしていたそうだ。通常モードがあんな感じでも、劉備は一応義勇軍の長なのだと改めて驚かされる。

と、不意に天幕の垂れ布が上がる。目線を移すとガタイの良い年配の男が乱暴に天幕から出て行く姿。その後ろを若い男女が続き、最後に出て行つた中で一番年下の少女が頭を下げて出て行つた。皆一様

に顔を覗いていた。

出て行つた人達の背中が見えなくなつてから俺は天幕に入る。

天幕の中にはテーブルやベッド、衣類等が備えており、テントというより部屋といった方がいい様な気がした。目的の少女は天幕の中央、俺に背を向けてテーブルを凝視している。

俺の気配を察してか、桃色の髪が揺れ、この時初めて俺と劉備は真正面に向き合つた。

緑と白を基調とした肩を出した衣服なのだが、中華というより現代の学校の制服……そうだ、うちの制服に何となく似ているんだ。夏に始まるイベント会場に出現するコスプレイヤーさんのような格好だが、こんなのもちやんと戦えるのだろうか？

振り向いた劉備を見た俺は言葉が詰まる。彼女の顔が憂いに帯びていたから。

「……大丈夫か？」

「……うん、大丈夫——じゃないかなあ……」

そう言つて困つたように微笑む劉備。それだけで何が話し合われたか察することが出来る。俺の顔を見た劉備がこくりと頷き、やがてポツリポツリと語ってくれた。

先刻、百幾らかの妖魔が村を襲つてきたそうで、劉備たち義勇軍は同数の兵を投入して挑んだ。……元々人数が少なく戦いが出来る人達は義勇軍の半分ほどしかいなかつた。そのさらに半分を戦に割り当て、残りを村の防衛に当てたという。

結果は惨敗。

劉備が率いた者達は劉備を守つて死に、他の者は彼女の仲間諸共行方不明。しかも劉備以外義勇兵は誰も戻つていなかつた。

だから仲間を連れずにのこのこと帰つて来た劉備に負の感情が集中する。

そも、義勇軍は民間で集まつた人達で構成されている、ボランティアで戦をしているような集団だ。

劉備の人徳と、行方知れずの仲間の武勇あつて集まつた義勇軍だつたため、この敗戦で彼女の実力が疑われ、離隊を願い出るもののが少な

からず居た。

劉備の義勇軍は落日寸前まで陥つたのだ。

正直言つて見てられない。けれど、こんな時にかけてやる言葉をおれは持ち合わせていなかつた。
だから、

「——折り入つて頼みがあるんだけど、良いか?」

「何かな?」

劉備の瞳を見つめていると、いざ言おうとした言葉が喉に引っ込んで目を伏せてしまう。けれどこれだけはちゃんと目を合わせて伝えるのがケジメなのだと俺は思う。生唾を飲み込み目線を上げて、再び劉備の視線と俺の視線が絡み合う。

「俺をここに居させてくれないか?」

「それは、みんな気にしないと思うよ? ここに居る人達つて色んな所から集まつて来てるから何処から来たかなんてどうでもいいって思つてるみたいだし。それに一刀さんは私の命の恩人だから」
それはわかつてゐる。

俺が劉備を救つた(ことになつてゐる)ことは村に知れ渡つており多くの人達から感謝を頂いた。——何処から「俺達の玄徳ちゃんに悪いクソ虫が……ッ!」などの怨声は聞こえなかつた。聞いてないつたら聞いてない!

「それだけじゃないんだ」

「?」

「……俺の話を聞いてくれ」

今度は俺の方がポツポツと語りだした。

自分の身の上——この時代の人間ではなく未来から來たこと。

俺の知る知識——三国志の世界でこれから起きてゐるであろうこと。

それらを包み隠さず劉備に話した。俺が話している間、劉備はじつと俺の目を見て沈黙を貫いていた。

その沈黙は俺が話し終える頃に解かれた。

「そつか……大変だつたんだね。でも、何で私に話したの?」

「——信じてるのか？　誰が聞いたって与太話でしかないだろう？」

「信じるよ」

即答だとつ。

「目を見てればなんとなく嘘ついてるなあつてわかるんだ。それに今
の私に嘘をついて得することなんて無いしね。眞面目な顔して本当に
に突拍子もない作り話をしてたら吹き出しちゃうかも」

そう言つて劉備は微笑んだ。

口端が緩んだ顔からは先ほどの見ている方が苦しくなる憂いは感じられない。

「……話は終わつてないよね？　聞かせてくれるかな」

「そうだな……」

ここで言い淀んだら駄目だ。そう自分に言い聞かせ、口を開く。

「俺の未来の知識を義勇軍に、君の力にならせてくれないか」

「つ！　それつて——」

「俺が誰も知らない知識を広めてさ、皆に貢献できるとしたら君の手
助けになれると思つたんだ。だから——」

義勇軍を立て直すために俺を使え、と言つて優しい劉備が冷静にい
られようか。

「駄目に決まつてるよッ！　これは私の問題、貴方には助けてもらつ
たけどそれとこれどじや話は全然違うでしょ!?　どうしてそんなこ
と言つちやうの……つ」

怒りか憂いか。

俯きふるふると小刻みに揺れる劉備。

まあ、そりやそうだ。そんなことをしたら俺は義勇軍で上位にラン
クインするかもしれない。たとえば理科の実験などを異世界の力だ、
と言つて吹聴すれば未知の力に興味を持つて兵に志願する人も増え、
兵の士気も格段に上がるだろう。

当然美点にもなれば弱点にもなる。

そもそも俺自身が弱点だ。象徴が無くなればそこで終わり。再び立ち上ることは無いだろう。

俺がその立場になつたなら必然的に狙われる。多分、劉備が懸念してるのはこのこと。それが俺に対して怒りを招いてるのか憂いを孕ませたのかわからないうが。

怒つていれば素直に受け止める。憂いていれば何とかして説く。
俺は口を開く。

「助けたいと思つたから」

「え……？」

劉備は俯いたまま反応を示す。

「言葉通りだよ。けど俺はこの乱世で数万の敵と戦えるほど強くないし、数十手先を読むほどの頭脳も持つてないんだ。だから、俺が出来そうなこと、俺自身が象徴になつて君を――劉備玄徳を支えてやりたい」

我ながら臭いセリフだと思う。

心に思つたことを言葉にしただけだ、つてやつぱ氣障っぽいよな。

俺の提案に打算が無い訳ではない。

今の俺はこの世界で正真正銘ただ一人。三国志の登場人物でもこの時代の人間でもない。

世界にぼつと現れた俺にこの世界を一人で生きることなんて出来るのだろうか。

妖魔という不明瞭な存在から逃げることなんて出来るのだろうか。
答えはもちろん否。

何処かで仕事をするにしても、歴史を知つていようがこの時代の常識を知らない俺が仕事を手にするのは困難だ。それに俺の時代の金銭感覚は全く当てにならない。

祖父の剣術もこの世界で通用するかもわからない。いや、通用するわけがない。あの妖魔達だつて、何らかの超常的な力が働いて勝手に倒れただけ。俺にはそんな力が無いことはよくわかつて。自分一人の身を守れずにどう生き抜けというんだ。
だから俺には後ろ盾が必要だった。

しばらくの間、沈黙の時間が続いた。

やはり俺の提案は駄目だつたか？ そう考えながら待つていると俯いていた劉備が顔を上げた。

「……本当に私たちの力になつてくれますか？」

静かな声だった。

丁寧な敬語に、俺は返答するのに時間がかかつた気がする。

「——ああ」

「私と同じ道を歩んでくれますか？」

まるで婚礼を挙げるみたいな言い方だ。けど込められた意味は全く違うもの。

その意味を噛みしめて俺は頷く。

「ああ」

「——私たちを、助けてくれますか？」

やつと、顔を窺えた。

白い肌に残る乾いた跡。出所はまだ雫が残つた真っ直ぐ真剣な眼差しを持つた碧眼。

「貴方に私たちの命運を背負わせても、良いですか？」

「ああ」

不意に。

劉備が跪き、俺に拱手をしてきた。

「北郷一刀様」

今まで彼女と接してきて、一番真剣みを帶びた声。

「私の真名を預けさせてください。姓は劉、名は備、字は玄徳、真名は桃香です」

真名の重要性は聞き及んでるから、真名を預けるというのは並なことじやないと理解してる。だから真剣になるのは当然だ。

同時にこうも思った。

「今から私と貴方は一蓮托生。貴方が死す時は私も共に逝きましょう——貴方だけに辛い思いをさせたくないから」

ああ、この娘は本当に優しい娘なんだな。

そんな優しい娘を俺は泣かせたんだ。

だつたら、覚悟を決めろ。
この世界の一人になれ。

懇願する少女の想いを踏みにじるな。

◆
所変わり。

「はあ……やつぱり失敗だつたかなあ……」

その少女は後悔していた。

空が暗くなつたと思つた瞬間、地震に巻き込まれたら何故か自分の知らない場所に居て、考えても仕方ないから取りあえず近くで召集をかけていた軍に集つてみたは良いものの――

「禄は少ないし、字が読めないから口で報告しろだと、氣味悪い奴らと鬭つたりとか、まともじやないよねえこ」

「……どんだけ田舎なのかしら、とまた少女はため息を吐く。
どんだけ田舎なのかしら、とまた少女はため息を吐く。
どんだけ田舎なのかしら、とまた少女はため息を吐く。」

「……今回負けちゃつたしね、ここも終わりかな。他の人達も出でいくみたいだし」

私たちも出ていこつかなー、と呟いた時、しゃがれた男の声が少女を呼び止める。

「どうしたの？」

「いえ大したことじゃねえんですが、兵糧の数がどうも計算が合わなくて……」

「……」

ちよつと心当たりがあつた。

少し前にみんなで鍋を突つついていた時に何処からか子供がやつてきた。匂いを嗅ぎつけて来たのだろう、折角来ててくれたのだからとその子供にも鍋を振舞つた。

すると見る見るうちに鍋は子供の胃袋に收まり、酒も入つていたので食べや飲めやの大騒ぎに発展してしまつた。ちなみに少女もその騒動に巻き込まれた。

足りないのは恐らくその分ではないか?

「……わかつた。それは私が明日なんとかしてみる」

「へい」

そう言つて男は持ち場へ帰つて行つた。

「たしかあの子つて、この棟梁とよく一緒に居たからあつちの関係者かな。頼めば出してくれるかも」

そういえば、あの子供はあれからどうしたのだろう?

栓無き事を考えながら少女は夜道を歩いていく。

楼桑村撤退戦 前編

薄暗い森に黒い騎馬が通り過ぎる。

蹄鉄の音は腐葉土に吸い込まれてくぐもつた音に変わる。馬の脚は止まらず、ただひたすら暗闇を駆けて行く。

「はあ、はあ、はあ」

その先頭。黒い鎧の中で唯一白の衣服を着た少女は焦っていた。

一言で云えば、彼女らは追われていた。依然追手の魔の手は少女達の背をかすめ、その道程で多くの仲間が死している。

「何処もダメか、クツソつ……！」

そう悪態吐き、己の無力さを呪う。

逃げ回つても応戦してもこの状況を打開できる自信は無い。

欲を言えば追手を叩きのめしたい。けれどもこの人数では鬭う以前の問題だ。

「筆頭！ 戌亥の方向上空！」

不意に部下の一人が声を上げた。

少女も釣られて空を見上げ——

「——しめた！」

自前の槍をその方角へ向ける。

「黒母衣衆！ あの煙の下に迎え！」

桃香とうかから真名を預けられた翌日。

当初の予定では今日俺が天の御使いだと公にされるハズだった。ちなみに天の御使いというのは、世界がおかしくなる以前に管轄という占い師が大陸で広めた噂だ。劉備曰く、天から降りてきた御使いが腐敗した世界を救済しにくるとか。俺が旗頭になるに当たつて必要なものがあつた。

武勇も智勇も、地位も名誉も無いメシ喰らいがただ居ても何にもならない。何も持つていない俺が名を挙げて兵を纏めるにはどうしようかという話になり頭をひねつてみると、桃香があつさりと提案し

た。

何も無いんだつたら自称しちゃえればいいじゃない、と。

人は神靈的な存在に畏怖と畏敬の念を覚えずにはいられない。だから天の使いの噂は利用できる。

—— そういえば桃香の中山靖王ちゅうざんせいおうの末裔つてのも一応自称だつたな。だから俺よりも名を高める方法をよくわかつてゐるのかもしない。

天の使いの噂は世界がおかしくなる以前からあるから、信じる人は多く居るだろう。よつて俺はそれに便乗する形で名乗ることになつた。

お披露目は今日。軍議の場で皆に紹介されるハズだつたのだ。

◆ 「待つてください！ 私の話を聞いてっ！」

黙々と作業を続ける彼らには桃香の叫びは届かない。手を休めず上官の指示を続行し、その上官もまた何事もないように指示を飛ばしている。

「お願ひです！ 私に力を貸してください……！」

彼らは昨晩、軍議に出てきていた者達。

桃香に用意してもらつた天幕に届いた声で目が覚めた俺は、早々制服に着替えて外へ飛び出た。そこには予想通りの光景が広がつてしまり、俺は知らず臍を噛んだ。

「お願ひします！ 考え直してくれませんか？ もう少しだけ一緒に戦つてください！」

そう。

彼らは義勇軍から離隊する。

原因是明白。信頼を失つた義勇軍の末路である。

桃香の必死の呼びかけは最後まで聞き届けられず、結局彼らは村から出て行つてしまつた。

「……」

茫然と、彼らの去つて行つた方向を見つめ続ける桃香の肩を叩く。

「桃香。彼らのことは仕方ないよ」

「でも……」

「まだ残つてくれた人は居る。今は別にやることがあるだろ?」

「——うん。そうだね」

「こくりと頷く彼女の顔はわからない。知る必要はない。前を向いて次に進み続けなければならない。

俺達に止まる暇など無いのだから。

劉備がくるりと振り返り、俺に笑みを向ける。

「愛紗ちゃん達の居場所を探さないとね」

「けど、急いだ方が良いな。関羽さん達が強いつたつて多勢に無勢つてもんだし」

「そのためにはみんなの協力が必要だね。まずはご主人様がみんなに認められなきやだから、一緒に頑張ろうね!」

「はは、期待に応えるかどうかは——」

ちよつと待てい。

「あー桃香? その、『ご主人様』って俺のことか?」

「? そうだよ?」

何をあたりまえなこと聞いてるの? みたいにキヨトンとしないでくれ。

「俺と桃香の立場つて変わらないだろ? むしろ俺の方が恭しく接さなきやならないんじやないか? いや、今も馴れ馴れしいけどさ」「真名で呼んでるし敬語も使つてないし今更なんだけど。

正直に告白すれば、女の子からのご主人様呼ばわりはめちゃくちゃ照れるし恥ずかしい!

俺の言い分に桃香がくすりと微笑み、

「だつてご主人様は『天の御遣い』さまだよ? 私とご主人様どつちが偉そなかつて聞いたら十人中十人がご主人様つて答えるよ」

両手にグーを作つて、問題ない! と言う劉備に俺は呆れるしかなかつた。同時に反論も失つた。

「……わかつた、呼び方はそれで良いから。——何だ?」

ふと、村の雰囲気がおかしくなつたように感じた。それは村の反対側から村人の声がざわざわと聞こえたり、その声が妙に慌ただしかつ

たりするからか。

「行つてみようご主人様！」

「ああ！」

一足早く駆けだす桃香に領き、桃香の背を追いかけた。

◆
桃香と共にざわめく人々をかき分けて彼らの元に着いた俺は目を疑つた。

まず初めに浮かんだ言葉は『ありえない』。

だつてそうだろう？

三國志に鉄砲なんてあるはずが無いのだから。

騎馬武者の中の数人が肩に担ぐそれは紛れもなく鉄砲。多分火縄銃という奴じやないだろうか。

何でそんなものがあるんだ？ と混乱している俺を余所に、桃香が騎馬武者たちに問いかける。

「貴方たちは誰ですか？ 官軍じゃなさそうですけど」

「官軍？ ボク達はそんな大層なものじやないぞ」

問い合わせたのは騎馬武者の中でも最年少の少女。赤毛をボーリツシユな感じに仕立てて後ろで結んで流しており、白いヘソ出しな着物と短パンを合わせた少年っぽい出で立ちだ。

彼女がいち早く反応したということは、もしかしてこの少女がこの騎馬武者の隊長的な立場だつたりするのか？

少女が馬から降りて桃香の前に近づいた。

「あんたがここを仕切つてるのか？」

「し、仕切つてるというか、何というか」

「何だよはつきりしないな」

しどろもどろな桃香に少女はイラついた態度を示す。

いやそれはマズいだろ。ここに居るのは桃香を慕つて集まつて連中だから、どんな目的があつてここに来たのかわからんけど、桃香は気にしないにしても村の人達は黙つちやいなぞ。

「その前に君の名前を教えてくれないか？ あと何でここに来たのかも」

助け船を出すことにする。

赤毛の少女はそれもそうちだな、と納得したように頷き、

「織田家黒母衣衆筆頭、佐々内蔵助和奏成政。妖魔を倒すためにあんたらの手を借りたいんだ」

◆
「佐々、内蔵助だつて？」

おかしい。何でここで戦国武将の名前が出てくる？

よくよく見れば騎馬武者の旗印は織田木瓜。腰の獲物は刀。魚鱗状の鎧ではなく腹当という甲冑。何より鉄砲を作る技術なんて三国志の時代には無い。

(どうなつてんだか)

どうやらこの世界は想像以上におかしくなつてているようだ。

「俺は北郷一刀。桃香……劉備の手伝いをしてる」

「あ、私は劉備玄徳です！ よろしくお願ひします！」

緊張した面持ちで自己紹介をする桃香。

そんなガチガチな桃香に対しても成政は目を丸くする。

「劉備つて……あの劉備？ 蜀漢の皇帝の？」

「はい！ えつと、人違いですつ！」

「でも劉備なんだろ？ 確か筵売つて三回お礼参りして国を三つに分けて出世したんだっけ」

「たぶん違う劉備です！ ……あれ、何で筵売つてたこと知ってるんだろう？」

……何だこの不毛な会話。

村の人達は何言つてんだこいつ、とか玄徳ちゃん皇帝様になるんだ。俺は最初から信じてたよ、など反応は様々で、一方黒母衣衆の人たちは『筆頭、それ色々とちやう』という視線を成政に向けていた。

ていうか昨日三国志では劉備は蜀の皇帝になつたつて教えたろうに。

ともかく話が進まないので、

「はいストップ。一人とも戻つてこい。バツクバツク」

「すとー？ でも私が皇帝つてありえないもん。ご主人様もそう思うでしょ？」

「それは置いといて……妖魔を倒したいって、どういうことだ？」

俺の質問に成政は顔を引き締め頷く。

「光に飲み込まれた後、ボク達織田は何度も妖魔に攻め入れられてたんだ」

成政らは地震が起きた時、光に飲み込まれてここに来たらしいが、それ以前は桃香と同じように俺の知る歴史を辿っていたのだろうか。「いくら追い払つても数を増やして攻めてくるから、うちの殿が業を煮やしてこつちから兵を挙げて妖魔軍を攻めてつたんだ

「妖魔に立ち向かつたんですか!?」

成政の発言に周囲の空気が揺れる。俺も同様だつた。

今まで妖魔の脅威に為す術も無く晒されてきたのだ。それに一矢報いようとする者が居たのだから、当然だろう。

しかし、

「待つてくれ、その織田の軍勢はどうしたんだ？」

問題はそこなのだ。

成政は肝心の攻め入つた後織田がどうなつたか、何故成政一人で救援を求めているのかを答えてない。知らずのうちに冷たい汗が背中を伝つて来る。

俺の問いに成政は目を逸らし、やがて答えた。

「……敗けた。三河や近江と同盟を結んで万全の態勢で挑んだけど、敗けたんだ」

「万全だつたのにどうして……」

「同盟を組んでた松永久秀に背中から刺されたんだ。それで妖魔軍と松永衆に挟み撃ちにされて……」

「そんな……妖魔に付くなんて……」

松永久秀。

戦国の梶雄の異名を持つ戦国武将。

「撤退してる時に皆とはぐれちまつて、それに追手にかかるボクの部隊はこれだけしか残らなかつた」

「待つてくれ、追手が居るのか？」

ということは、彼女が敵を引き連れたままここに来たことになる。「その事については悪いと思つてゐる。森の中で離したりしたけど、あまり余裕は無いだろうな。この通りだ」

そう言つて成政が頭を下げた。

「あの、將軍様が私なんかに頭を下げるのは」

「頭は下げなくていいよ。ここも最近妖魔に攻められてたから、どうせ時間の問題だつた」

「そう言つてもらえると助かる」

それでもなお頭を上げないのは彼女なりのケジメなのか。

「確認だけど、妖魔の数は？」

「500弱」

その数字を口にした瞬間に周囲が凍り付く。何故なら義勇軍に残つてる人数は100にも満たないからだ。

「桃香」

「う、うん。皆も聞いた通り、妖魔が押し寄せて来ます。皆さんには指示があるまで備えていてください」

桃香がそう伝えると何かを言いたげだつた村人は各自に散つていく。

「それじゃ私たちも行こつか」

そう言つて桃香は微笑んだ。



「それじゃ、今後の方針について話し合おつか」

軍議が開かれたのは桃香の天幕。今ここに居るのは桃香と義勇軍副官の代理さんと俺、それに成政と彼女の副官が一人、という構図だ。「今私たちの戦力は妖魔の半分にも満たない寡兵です。正直、成政さんの兵を借りても力及ばないと思います。よつて取れる策は——」「各個撃破じやねーか？」

成政は桃香の言葉を遮つて方針を言う。

軍略とか全くわからないが俺もそれが良いと思う。正面からぶつかつても負けるけど少しずつ削つていけば可能性がある。

……しかし、

『……』

成政が発言した途端に空気が幾分か下がった気がする。

それに心なしか成政の喋り方に威圧感があるような……。

「大体桃香つて戦えんのか？ 立派な剣ぶら下げても強そうに見えないんだけどな」

爆弾を落としやがったのである。

「なっ?! あなた、玄徳ちゃんの真名を……っ！ どれだけ侮辱したら気が済むんだ!!」

桃香の背後に控えていたおじさんがいち早く反応し激怒した。

「？ 通称だから呼ぶんだろ？ つうか侮辱した覚えはない！」
売り言葉に買い言葉。互いの罵倒が雪だるまのように大きくなつていく。

おろおろとする桃香に見かね、俺はパン！と柏手を打つた。

「そこまで！ いがみ合つても時間の無駄だ！」

「で、でも真名を……」

「わかってる。……さつき、君は姓と名と諱の他にもう一つ名乗つたろ？ 和奏とか言うの」

成政は訝しげな表情でああ、と応える。

「通称つて言つて、自分を表す名前だ。真名とも呼ばれてる」「は？」

うわ、桃香達がすつごい間抜けな顔になつた。

「通称は親しい間柄だつたら気安く呼んで良い名前だ」

成政にとつて通称は友達感覚で呼んでも構わない名前。対して桃香にとつて真名は神聖で軽々しく呼んではいけないもの。この擦れ違いで起こつてしまつた諍い。

付け加えて、

「こつちじや真名は君達の諱と同じ意味を持つてるんだ」

「え、マジかよ!?」

成政の方も顔を青ざめさせて桃香を二度見した。自分が仕出かし

たことを自覚したようだ。

「そういうこと。勝手に呼んだら首を刎ねられてもしようがないものなんだよ。両方知らなかつたんだからこのことは水に流す。それで良いな？」

俺がそう呼びかけると皆渋々といった感じで黙り込んだ。

何処の誰ともわからない、北郷一刀がこの軍議の主導権を握つて ようであまり良い気分じやないようだ。

そんな中、口を開く者が居た。

「あの、和奏ちゃん、つて呼んで良いかな？ 和奏ちゃんも私のこと桃香って呼んでほしいな」

「な、何だよいきなり」

前触れも無く話を振られた成政は目に見えて狼狽える。
そんな成政に桃香は、

「今は緊急事態だし、つまらない事で皆の心がバラバラになるのはダメだと思うんだ。だから妖魔達に好き勝手を止めようとしてる者同士、仲良くなりたいなつて思つたの」

聞きようによつては戦力増強の尤もらしい名分だろう。

だけど、力を貸せと言つてきた者に對して仲良くなりたいとは。

(桃香らしいな)

思わず笑みがこぼれそうになり、ぐつと顔に力を込めた。ここ笑う
とこじゃない。

「……つちこそごめんな。知らなかつた、つたつて大事なもん
だつたわけだし」

「それはお互い様だよ。だから、ね？」

「ああ、改めてよろしくな桃香！」

「よろしくね和奏ちゃん♪」

成政——和奏が照れくさそうにはにかむと桃香も柔らかく微笑んで彼女の通称を呼んだ。

一先ずこの場での確執は無くなつた。その事に俺はほつと息を吐いた。

一時はどうなるかとひやひやしたけど、先ほどの空氣は二人の和解

から四散してしまった。

（これも桃香の仁徳か……）

「それじやあさつきの続きだけど――」

楼桑村撤退戦 中編

500の亡者を率いる出つ腹の妖魔は苛立たしげに足元の桶を蹴り上げた。

バラバラと碎けた木くずを頭から浴びる亡者達は、事の終わりをじつと待っている。

「斥候は何してるんだ!? 村に何人居るかもわからねえ無能どもなんか?!」

喚き散らされる怒声。

それだけが無人の楼桑村に響き渡る。



劉備達義勇軍十黒母衣衆が取った方針は、撤退だった。

妖魔軍の数の差は歴然。劉備を信じて力を貸してくれる民兵と、織田軍を打ち破った妖魔兵との鍛度の差も話にならない。武器もあちらが上なのは確実だ。だから彼女らは撤退しか手は残されていかつた。

撤退＝村を捨てるということで村人に反対されると思いきや、意外と反論は少なかつた。

村人のほとんどは劉備を頼る他、生きる道はなかつたのと、劉備を信頼していたためである。

村を捨てるのに反対する者や運び出せない私財に執着する者達は佐々成政から斎もたらされた一つの情報によつて渋々折れ、結果村人全員を退去させることが出来たのだつた。



無人の楼桑村で妖魔、以津真天が地団駄を踏むのは理由がある。

以津真天は先の織田との戦で、何も知らざずに囮として扱われた過去がある。結果、それが勝因の一つになつたのだが、それを周囲が使い捨てと茶化し以津真天はずつと根に持つてゐるのである。

妖魔の軍師に命じられた織田の残党の殲滅で気が晴れると考えていたが、成政の奮闘でいつまでも終わらない追撃に腹立たしさを覚え、今に至る。

そんな怒髪天の妖魔に長身一つ目の妖魔が音も無く近づいた。

「どうした!? 対して使えねえ隠密技能をひけらかす暇があつたら
さつさと奴らを探してこい!」

「……そのことでご報告が」

一つ目の妖魔は胸の内から湧き出るものを探し殺して返答する。
「河川に村人と思わしき集団を発見。その周囲に護衛部隊が幾つか配
置されている模様」

「けつ! さつさと見つけてろつてんだノロマが! オラツ、追うぞ
野郎どもつ! 遅れるんじやねえぞ!」

「(……ちつ)」

急な進軍に足並みが揃わぬのろと動き出した。

敵は少数。そう焦らずとも簡単に捻り潰せる相手に肩ひじ張らな
くてもいい。少なくとも以津真天麾下の亡者達はそう考えていた。

楼桑村から妖魔軍が出切つた時、

「……あれは」

ふと聞こえる馬の駆け足。前方に配置された亡者はその方へ目を
向ける。

案の定、妖魔軍から数里（中国単位。一里500m）離れた所に居
た。

後ろに結つた赤い髪が尾を引き、白い着物がはためかせるあの少女
は。

黒の騎馬団を率いてこちらに迫るあの武将は。

「くつ、ふくははははははははア! わざわざ出向いてくるなん
てなあ! 者ども、矢を構えろッ!」

紛うことなく、あれは自分たちの獲物。

ようやく出会えた。これを始末すればこの息苦しい任務は終わり
だ。そういった思考が沸々と妖魔軍に伝播していくが、

「…………ええいっ、何故近づいてこないのだ……!」

成政ら黒母衣衆は妖魔達に近づいて来てはいる。だがその進路が
ジグザグだつたり、時にバラけたりするため中々射程圏内に入つてこ
ない。

じりじりと火に炙られるような焦燥感が襲う。

そして、成政が乗る騎馬が射位に入つた時、

「いつ――!?」

その騎馬は速度を落とし、その場でUターンして範囲内から離脱した。

をもたらす。

以津真天と同じく緊張と焦燥に苛まれていた亡者達は何処からか発せられた声に反応し、その中の一人がひゅッと矢を放つてしまつたのだ。

あ、と誰かが呻いた。

刹那、一斉に矢が放たれる。

やめると叫ぶ声は時遅く
放たれた矢はかすりもせずに地面に突
き刺さつた。

こうして妖魔軍は無駄に矢を消費した。

——といつてもすぐに標的を捕捉して、矢を番えなおせば問題ない話だ。歴戦の士ほどでないにしろ、戦のイロハがわかつてゐる妖魔軍。このぐらいでは揺るぐことは無い。

問題は、敵騎の姿がないことだ。

「逃げたか……！」ちよこまかと鬱陶しい奴らだ！」

追いかけろ！ と号令を飛ばし再び進撃する。

彼らの苛立ちは正常な判断を鈍らせたのか。

と、同時に、視界を遮るように盛り上がった丘を登り切った先兵がバタバタと倒していく。

「待ち伏せか。
側方から回り込め！」

そうして回り込む兵は素つ頓狂な叫びをあげて以津真殿の視界から消えていく。丘の横には落とし穴や虎バサミのような罠が張られていたらしい。

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!! ナメやがつて、ナメや
がつてえええええええええええええええええええええええええええええ
ええええええ!!

愚策に愚策を重ねる以津真天。

敵はほんの十数騎なのにとんとん兵が洞つていく

一あの無能ムカシ！

「誰だアレに指揮を任せた奴……」
妖魔軍の中央で隊を纏めていた一つ目の妖魔、襟立衣が憎たらしげに呟く。彼の眼先でまた指令を出す妖魔が狼狽える様子が伺える。

裸立衣のはそはそ声に含めて賛同するものが多數居た

川柳柳でテクテクと刺されるよ。な作戦は軍隊の士気は一がりく
ぱなし。比例するように以津真天に向けられる殺意がグツと増した。
本人は頭に血が上つてそんなことに気づいてないが。

「これより別行動を取る。我に続け
玉に取られる指揮官に任せていたら確実に被害が及ぶ。」

村のある方角から何かが破裂するような音が聞こえ、行軍の大半が足を止める。

劉備もその一人だ。

「はあゝ。今のが鉄砲の音? 本当に大丈夫かな……」

村から距離が離れていてもここまで音が響いてくることに驚くが、あんな鉄の筒が本当に武器なのか劉備達には半信半疑だつた。

命を下した。

やがて劉備義勇軍はまた足を止めた。

理由は目の前に広がる大河にある。この大河は樓桑村と撤退先の劉徳然が居る村を挟むように大量の水を流している。

劉備と北郷が考案した策の要はこの大河。この大河が妖魔軍の足を一時的に停めてくれるだろう。

なら劉備義勇軍は？

「劉備さん！」

はあく、と豪々と岩をも流す流水に心を奪わてた劉備に声がかけられた。

劉備とさほど変わらない少女のものだ。

その声の主は劉備の斜め前——つまり川上から船に乗つてやつてきた。

「小六ちゃん！」

「お待たせしました！ 何事も無く何よりです」

蜂を模した髪飾りでサイドテールを作り、ぴつちりとしたインナーウエアを着込んで白い羽織を重ねた少女が船を岸に着けて劉備の下へ駆けてくる。

この蜂髪飾りの少女、蜂須賀正勝は元々劉備の義勇軍に属していた一部隊の隊長だつた。ほとんどの部隊が離隊したのだが、どうゆう偶然か、蜂須賀正勝率いる川並衆は未だに劉備の下から離れてなかつた。さらに軍議を行つていた天幕に突然訪ねてきて、たまたま正勝の名を聞いた北郷が土下座をせんばかりに村人の護衛を頼み込んで今に至る。

抜擢された正勝は始めのうちは大混乱に陥つっていたが、次第に落ち着きを取り戻し、

『色々とお世話になりましたし……わかりました。私たちに出来ることなら』

と不安げながらも承諾してくれた。

ふと正勝が北郷と劉備との出会いに想起して、
（何で了承したのかな私？）

北郷からこの話を持ち掛けられた時、一緒に居た川並衆からも反対された。正直言つて正勝も妖魔五〇〇騎を相手にするのは怖くつてすぐに逃げたかつた。

特に思い入れも無い樓桑村の問題。

「この人達が蜂須賀ちゃんの部隊？ ふわくすづく強そうだね！」
ペタペタと正勝と共に来た屈強な男の盛り上がりがつた筋肉を興味

津々で触っている。触られている男もまんざらでない様子だ。

「……劉備さん」

「あつ、めんぐめん！ ジャあよろしくね」

劉備が正勝に頼んだことは単純。

人を対岸まで運んでほしいと言った。

川並衆は水運を得意とする集団だ。この荒れる大河で人を運ぶことは彼らにとつて容易なのだ。

(……あれ？)

不安定な船に村人を乗せている最中、ふと何かが足りないような気がした。

「蜂須賀様！ 全員乗り終えましたぜ！」

「あ、はい！ 貴方たちは後続が来るまでここで待機してください！」

私は対岸まで送つたらまた引き返します！」

男たちの威勢の良い声が耳朶を打ち、正勝は内心ほつとして船に乗り込んだ。

たくましい男たちに押された船が水流に揉まれ、不安定に揺れる。が、そこは水運を司る川並衆。船頭と漕ぎ手が櫂を操れば、たちどころに揺れが治まった。たつたそれだけの動作だが、普段船を使わない樓桑村の人間は川並衆の手際の良さに感嘆の声を上げる。

船に乗るのは初めてなのか、きょろきょろと不安げに見回す男子。そういえば、荷運びしていた時に肝試しと称して正勝の尻を触つてきた事があった。その時は周りに居た屈強な川並衆がおどかして泣かせていたつけ。

頻りに村の方へ目を向ける中年の男は小料理屋の店主で、義勇軍の胃に溜まつてるのは大体彼の作る料理だ。多分村にある店が荒らされないか心配になつてているのだろう。

別の船に乗る妙齡の女性は義勇軍の物資を提供している人で、(補給交渉的な意味で)宿敵。ラスボスだがいつもの勝気な雰囲気は無く、それでも周りを不安にさせないよう何事も無いように振舞っていた。

その中に、いつか出会つたあの女の子の姿が無いことに気づいた。この中に居ないとすると、もしかしたら――。

(そういうことなのかな、私が手伝う理由)

自分はもつと俗的で理知的な人間だと思つていたが、そうではなかつたらしい。何となくまだ自分は青いと戒めたり、人間味があることにホツとしたり。

「そういうえ……川並衆の名前を知つても、ただの野武士に過ぎない私の名前とか水運に通じてる事まで知つてるなんて……北郷さまつて本当に何者なんでしょう？」

「決まってるよ」

独り言が劉備の耳に届いていたらしく、にこやかに、

「ご主人様は天の御遣いなんだから」

◆
と、胸を張つて言い切つた。

さて、その天の御遣いさまはというと。

「おい兄ちゃんもつと強く引けやーらあ！」

「すいません！」

使えねえなあ、という視線を向けられながらロープを力強く引っ張る北郷。手のひらがロープで圧迫される痛みに耐え、不器用ながらロープを木の幹に括り付けた。そんな様子を樓桑村の人達は遠巻きに見るだけだ。

北郷一刀は劉備らのはるか後方。成政の少し前方。そんな所にある雑木林に居た。

いくら劉備達に土地勘があつても何もせずに逃げても追いつかる可能性が高い。追いつかれたら戦闘能力のない村人がどうなるか想像が容易い。だからこそ予防線として樓桑村と劉徳然の村の間に生い茂るこの雑木林に足止め程度の罠を張ることにした

「……つーか、何で俺ここに居るんだ……？」

晴れて義勇軍の旗印になつた一刀だが、得体のしれない人間を劉備の近くに置いておくのは嫌だ、なんかひょろつちいし力仕事に回そうぜ！ という村人の総意によつて拉致られたのだつた。

北郷自身信用されてない事についてしようがないと割り切つている。が、こうも露骨に突き放されるのは応える。

不意に。

北郷の耳に大成を叫ぶ声が飛び込んでくる。

皆が作業の手を止めて頭を上げる。そして皆同じような表情を浮かべる。

悲壯にくれた顔ではなく、達成した表情へと。

「よし着いたー！ つて一刀、何でここに居んだ？」

「まあ色々と……。とにかくお疲れ様。これで第一段階クリアだな」

くりあ？ と成政が首をかしげる。

林の唯一罠が張つてない出口から成政を始め、続々と黒母衣衆が顔を出した。

5、10、15……。少人数ながらやはりそこは幾多の戦を潜り抜けてきた者達、一人も欠けることなく全員汗と泥に塗れながら帰ってきた。

「とにかく！ 早くとルー……道を閉じて合流しよう。桃香達も待つてるだろうからな！」

朝早くから足止めを行ない、さらに走つて合流となるとかなり疲れるだろうが、今はとにかく時間が惜しい。このテンションを下げないよう、一刀が一大声を張り上げた。

呼応して黒母衣衆が、続いて工作を行なつた村人達が声を張り上げる。

「よし、撤収するぞ！ 劉備ちゃんに心配かけさせんな！」

『応！』

全員が生きて帰るため。劉備のお願いを為すために彼らは黒母衣衆が出てきた道を閉じて撤収作業にかかる。

——劉備の願いは、結局叶うこととは無かつた。

「ギヤツ」

短く小さい、それでも皆の思考を止めるのに充分な悲鳴。

「どうし、い、!?」

「ベニ」

所々から聞こえる悲鳴は、時間が経つにつれて数を増やす。

北郷はただ矢に刺された村人が地に伏せるのを見つめることしかできず、楼桑村の皆も同じ。

いち早く動き出したのは成政だつた。

成政の号令を合図に、黒母衣衆が村人を囲むように陣形を組み刀や槍、弓矢と鉄砲を構える。敵が我に返ったのを見計らつたようで矢は放たれてこなかつた。

沈默

そして。辺りに流

「上だ！ 木から跳んできた！」

辺りに流れる音は緊張の息遣いと風でこする葉の音だけ。

成政が反射的に見上ると、青白く輝く眼を持つ巨大な影が手刀を構え降り立つ姿が――

36

楼桑村撤退戦 後編

ドスツ!!と。

肉を裂く生々しい音が耳に残る。

続けざまにこすれ合う金属音が空気を震わせた。

結論から言うと成政は無事だつた。

突然の奇襲で面食らつた成政だが、すぐに馬上から飛び降りその場で一転した。襟立衣の一突きは成政の直線状に居た騎馬に突き刺さつたのだ。腕に刺さつた騎馬という枷による隙を見逃さず、受け身を取つた成政はすぐさま襟立衣に自身の得物を振り抜いた！

しかし、单眼の妖魔は巨躯を持ちながら俊敏で、成政の一撃をもう片方の手甲で容易く受け止めてしまう。

「矢あ、放て！」

恐ろしいほど低い声が命令を下すと再び成政と襟立衣の上を矢が通過する。

「テメエ、弱い奴から狙いやがつて！ 新介と何人かはそいつら連れて撤退！ 流れ弾に気を付ける！」

「はっ！ 楼桑村の皆さんには私に着いて来てください。黒母衣衆は彼らを守りつつ矢を放つて迎え撃つて！！」

黒母衣衆の黒髪の後ろ部分を赤いリボンで結んだ赤い衣服の少女が代表するように声を上げる。

「残つた奴らは長柄で牽制して間合いを詰めさせるな！ いいか、一兵も通すんじやねえぞつ！ 全力で食い止めろ！！」

黒母衣衆に促された樓桑村の民は一直線に逃げようとし、背中を向けた数人に矢が突き刺さつた。成政は苦々しい顔を見せ、すぐさま立ちふさがる单眼の妖魔に目を戻す。

北郷の頬にも矢が掠つて赤い線を作る。ハツと醒めた北郷は樓桑村の人達の方へ駆けだそうとして、

「あつ……」

見てしまつた。地面に這いつくばつて目を見開いたままのそれを。たつた数分前まで共に作業していた彼は、桃香との約束を守れず悔し

げに顔を歪ませてるようだ。少なくとも北郷にはそう見える。

不意に、背中に強い衝撃を受けた。一瞬死んだかと思つた北郷は、そのぶつかってきたものが成政だとわかり思わず息を吐いた。

「ぼさつとすんな！ さつさと逃げねえとホントに死ぬぞ！」

若干成政の声は喧むせていた。腹を押さえている所を見ると強く打ち付けられたようだ。

「でも君は——」

「こいつらをここで始末しねえとこの撤退は困難になる！ それに元々ボクらが連れてきたんだ。尻拭いすんのは当然だろ？」

再び北郷は成政に押されて地面に倒れこみ、刹那、ギャインツ！ という高い音が響き渡つた。成政の槍と襟立衣の手甲が奏でる金属音だ。会話している途中で北郷を狙つて一気に迫つたようだ。

「これ以上犠牲を出しちゃ、桃香とうかとの約束を果たせない！ 早く行け！」

成政の叱咤に北郷は駆けだした。

今度は振り返らず。周囲を気にせず。しつかりと前だけを見て。

◆
苦しげな息遣いが周囲を包んでいる。男はそう感じた。

死にたくない一心で矢が降る戦場を駆け抜けた為か、あの林から離れたこの辺りは汗の匂いと熱気がむわっと立ち込めている。周囲に居るのは見慣れた義勇軍の男達と黒母衣衆とか言う連中が2、3人。その中に御遣いは居ない。ちらりと男連中を見ると安堵の表情と妙に強張った表情が混ざったような顔をしている。恐らく男自身も同じ顔をしているはずだ。

「——くそ！」

頭が冷えて胸の奥からジンと悔しさが湧き上がる。

黒母衣衆やかつて劉備を支えた義勇軍の猛者達のような立ち回りをするほどの力は自分には無い。力仕事が得意だからって、それがケンカが強いと繋がらない。そういった剣も弓も使えない自分への失望感が男を蝕んでいく。

村人たちの重い空気が蔓延する中、逃げ遅れた救世主様がやつと追いついた。誰かが来たことに気付いた人は居たのだが、今にも全て投げ出しそうな雰囲気の彼らはそれが一刀で、やけに神妙な顔付きになつていることに気づいていなかつた。

しばらくすると、一刀の方から声がかかる。

それはもう、軽い感じで。

「木に止まつた鳥を取るのつて得意？」

◆

軍と軍の戦いは個人の力が物を言うのではない。指揮する者の裁量が敵の指揮者の首までの道を最適に取ることもあるし、軍の鍛度が数を押し返すことも歴史が証明している。数の力が個人の武を蹂躪するなど当たり前だ。

この戦いでの構図はこうだ。

織田の三若・佐々成政率いる黒母衣衆の手勢は20にも満たない。劉備の義勇軍の戦える人を足してやつと30余りといつたところだ。が、彼らは織田信長の馬廻衆として、特に鉄砲の扱いに秀でているいわゆるエリート集団だ（その筆頭は鉄砲よりも直接槍でぶつさす方が好みなのだが）。まだ経験が足りない若輩者と寡兵の集団とはいえ、そこらの山賊辺りを蹴散らせるほどの実力はある。

その一方で襟立衣率いる妖魔部隊は成政と50前後。しかし、黒母衣衆が相手をしてるのは人間ではないのだ。

人より優れた^{スペック}膂力^{（フィジカル）}。人を超えた体力。そして死を恐れない精神面。

それを指揮する单眼の妖魔は成政よりも苛烈で冷酷で残酷だつた。

「うあつ!?

襟立衣の強烈な掌底をマトモに喰らつた成政が軽々と吹き飛んだ。

少女の柔らかい腹部に受けた強烈な痛みで、思わず自らの獲物を手放して地面に転がり落ちた。彼女の周囲には同じように叩きのめされた黒母衣の兵士が居る。

それらを見据えるのは、当然妖魔の部隊だ。

成政の雄叫び。

得物の槍を諦め、主を亡くして血が付いた刀を拾い上げ、妖魔達に立ち向かう！

一刀目。——亡者の持つ槍の穂先を断ち。

三刀目。
——禁立衣の伸びる拳を受け止め、吐返しとギ

かかる。

四刀目。——成政の斬撃は間に入ってきた亡者に邪魔されて止まってしまう。

命を犠牲にした肉盾は刺されてもなお成程
その不気味な行動に成政は怯んでしまい——

— うべ —

襟立衣の蹴りを受け、ゴムボールのように跳ぶ。痛みで視界があやふやで、今何がどうなつてるかなんて成政にはわからない。圧倒的だった。

元々の地力が違う妖魔。
ヒトとは一線を越えた相手。

ソレに立ち向かうには何もかも足りてない。

妖魔の具足の先がわき腹に突き刺さる。為されるがまま、少女は無様に転がされるのだった。

单眼の妖魔から見れば、彼らはあの以津真天が苦戦するのか理解できないほどの小物。さつさと潰して本軍に帰隊して、あんな無能から離れたい所だ。

が、ここまで引っ搔き回されてイラついてないといえば嘘になる。
甚^{いたぶ}振り躊躇りゆつくりと踏み潰して殺さないと怒りが収まらない。

鋭く尖った具足の次の狙いは少女の顔。人間の美醜感などよくわからぬが、この女の顔を滅茶苦茶にしたらさぞ爽快だろう。

そんな考えに浸っていたからだろう。

飛んできたこぶし大の礫が横つ面にぶち当たるまで気が付かなかつたのは。

「——つつつつ!!?? つ!？」

グワングワンと視界が揺れ、一つしかない眼球が宙を彷徨う様は不気味の一言。

そのフラついた一瞬をつき、飛び出してきたいくつかの影が倒れた成政を引きずり、槍を待ち去つて妖魔から距離を取つた。

「————！————！」

そんな中で一番驚いたのは成政だつた。

固い物がぶつかつた音がしたと思つたらずりりと引っ張られ、状況の変化を飲み込めないでいた。

「な、なん……？」

「——じかつ？ ケガ無いか成政！」

「……北郷？」

声を掛けた現在進行形で成政を引きずる相手が目に入つた途端、

「——つて、何してんだ!?」

「助けに来た！」

「助けについて、逃げろつつただろうが！ 何で戻つてきてんだわあ！」

「！」

「『ごちゃごちゃ言う前に逃げるぞ！ ギヤー矢あ飛んできた!!』

指揮官がやられて焦つてゐるのか、いくつもの矢の空氣を裂く音が耳元から聞こえて背筋が寒くなる。

「皆さん妖魔から距離を取つて！」

成政には聞き慣れた黒髪の少女の声が響き渡る。

正気を取り戻した成政は自分の足で立とうとするが今は引きずられてる真っ最中。為されるがまま引っ張られていつた。

襟立衣の眩暈が治つた時には、成政たちははるか遠く。

「己エ……！」

この程度の距離、妖魔の脚力ならばあつという間に追いつける。が、一旦背を向けた者達がこうして戻ってきたのなら、待ち伏せしたかもしれない。このまま追撃してしまえば恐らく以津真天の二の舞になつてしまふ可能性がある。

そして、

「（……亡者どもも限界か……）」

妖魔が人間を超えたスペックを持つてると言つても、流石に騎馬より速く走るのは無理がある。いくら手塩を掛けた手練れでも疲労を感じるもの。

加えて、先の奇襲で死傷は無かつたものの、負傷者がいくらか出た。

「（印地、か）」

縄に巻き付けた石を振り回し、遠心力を推進力へ変換させて敵に打ちよう
ちやく擲ちやくする技術。単に投石ともいう。

印地は北郷が生きてきた時代ではほとんど普及していないが、劉備や成政の時代は子供の遊び感覚でできる。

そしてその威力は生き物の骨を碎き、鎧に当たろうがその衝撃でダメージを与えられるほど危険なものだ。

兜の当たつた部分を触ると今まで無かつた凹みがあり、正直フラつく程度で良かつたと息を吐いた。

亡者は多数負傷し、この先は待ち伏せがあるかもしない。
とてつもなく遺憾だが、次の手は決まつた。

「……撤退……」

ぼそりと一言。それだけで亡者は負傷者を担ぎながら本隊が居るであろう方向へ歩を進める。

先行し一気に片付けたがつたが叶わなかつた襟立衣は——取りあえずこのイライラを以津真天を殴つて解消しようと心に決めた。

成政を助け、必至に走つてたらいつの間にか河川まで來ていたので
一安心してたら、目一杯殴られた。 by一刀

安心してたら、
目一杯殴られた。
by 一刀

「ばつかじやねえの!? 丸腰で飛び出したから何か秘策があるかもつて思つたのに、待ち伏せとか罠とか何もしてねえし、揚げ句全速力で走つたから全員足ガクガクだしお前つ、ばつかじやねえの!」

ていただけませんか……？」

て、どうか新介！お前は引きずってても止める役なのに何でホクを引きずつてんだよああ！」

「ひいいい！ だつてだつて、櫻桑村の人達の勢いが怖かつたんですね！ そこの山賊より凄味があつたんですよ！」

そんなこんなで髪を搔き舐めて喰う鬱らして大成政は不意に力
クツと脱力した。

「……あんまり無茶な事すんなよな。一応お前も人の上に立つてんだから、もしものことがあつたら困るのは下の奴らなんだぞ」

その様子に俺は慌てて返答を返そうとした。——顔の腫れが引かず喋りにくいが。

「……げ、けど、どうならないために桃香ど二人で率いてるんだし」

「お前な～……もしお前に何かあつたら桃香に申し訳立たねえだろうが。それに、多分桃香はすっげえ泣くと思うぜ？」

成政の言う通り、桃香が落ち込む姿が脳裏に浮かぶ。自分の所為で、と自身を責める姿――。

三
そうだ、俺はまだ彼女との約束を一つも叶えてない。彼女の笑顔を曇らせるなんて人間、いや男として最低ではないか？

「佐々さん」

「なんだよ？」

「ありがとな」

彼女との付き合いなんてほんの数時間ほどしかないけど、なんとかわかる。武将としての忠告だけでなく、成政は俺と桃香を心配して、さつきの言葉を掛けたのだと。

だから感謝を述べたのだが、彼女は一瞬俺の目を覗き、「わかつたんならさつさと行くぞ」

すぐにさわやかにニカッと笑つてそう言つた。



その後、蜂須賀小六率いる川並衆と合流し、待機していた筏で運河を渡る一行。小六の話を聞けば、先行して桃香達はそろそろ隣村へ着いてる頃だと言う。徒步で大よそ6刻（日本の旧暦で1刻＝30分、3時間）ほど。谷で入り組んでるため少数人はまだしも、500の軍での行軍はかなり時間がかかる。馬は筏に乗せれないので、河原で逃がすことになった。

「良いのか？ 馬つて高いんだろ？」

「それは言つても時間は掛けれないしな。それに馬つて案外頭が良いんだ。妖魔どもに食われない限り戻つてくる——はず」

「はずつて言つた？ 今、はずつて言つたよな？」

緊張感の無い俺たちの会話に『こんなところでイチャつくんじやねーよばかやろー』という視線が方々から送られるが、それに気づくことはなかった。

成政と、時折同じ筏で櫂を漕いでいた正勝を交えた他愛もない会話は川の中腹付近まで続いた。

感じたことのない緊張感で口を開いてないとリラックス出来なかつたのだと、後で思い返して理解した。

そんな時。

「……？ 何だか後ろが……」

正勝の訝しげな呟き。

たまたま彼女の声を聞き取れたため、釣られる様に視線の先を追つた。

正勝が操る俺たちが乗る筏の後ろについた筏から悲鳴じみた声が聞こえる。そして、そのさらに後ろ。

足で水面を叩きながらこの激流を猛然と泳ぐ黒い集団が迫つてきていた。

「んなあっつ!? あんなのありか!!」

成政は正勝に向かつて吼える。

「おおい！ 筏もつと速度出せねえのか!?」

「無理です！ 川を横断するのは簡単な事じやないんですよ!!」

「てゆうか泳ぐの速いなあいつら。ただのバタ足なのに」

「そんなこと言つてる場合か!!」

それにしても速い。（思わずほれぼれしそうな）泳ぎもそうだが、この行軍。あの先行隊の情報が届いて進路を変えたとしても速過ぎではないだろうか？

これが人間と妖魔との越えられない壁スペックだというのか……！

「矢で迎撃しろ！ 近づいてきたらボコボコにしちまえ！」

号令が飛ぶ。

射られた矢は弧を描いて妖魔に殺到する。が、

「当たつてんのにぜんつぜん減らねえなちくしよう！」

筏の揺れの所為か、矢の量が少ないか、はたまた当たつても次の敵が湧いてくるのか。とにかく放つても放つても妖魔が追つてくる。櫂を漕ぐ正勝も苦悶の表情を浮かべて、それでもなお腕を振り続ける。

どうする？

ここじや石みたいなものは無いからさつきみたいに村の人達の手を借りられない。

妖魔の遊泳力を見るに、後ろの筏が対岸に到着する間もなく襲われるだろう。

何かないのか？

ただ窮地を切り抜けてほしいと祈ることしかないなんてわかりきつて。わかつてから尚更手に力が入る——

ふと、心地良い風が熱を持った頬を撫ぜた。

次の瞬間、

ビュゴオツツツ!! と、圧倒的な圧力が叩きつけられた。

「うおつ!?

「きやあ!?

立っていた人が筏から落ちるほどの風。

それは『この川に居るもの全て』に襲い掛かつた。

「あいつら……」

成政が茫然と呟いた。

どういう原理が働いたのか、俺たちの筏の後方に居た妖魔達は俺たちを襲つた風よりも数倍の威力になつて吹いたらしく、黒い集団は散り散りになつて下流へ流されていく。

……あつ。

「つて、蜂須賀さんは!?

さつきの風に煽られて誰かがこの激流に落ちたんだつた！ そしてさつきまで隣で立つて作業してた正勝が居ない！

「わふ、私はだいじょうぶ、です」

ぶつ、と吹き出す音と共に低い位置から聞こえた声。やはり彼女は落ちていたようだが、一緒に乗つっていた誰かが彼女の櫂を掴んでいたようだ。

正勝を引き揚げながらホツと息を漏らした。

「にしても、すつげえ風だつたな」

成政が妖魔が流れて行つた方向を警戒しながら呟く。

「……この地形からして、風は吹くと思いますが……今のは異常、ですね」

正勝の言い分は領く他無い。

将来仲間になるかもしれない諸葛亮のように気候学に詳しいわけじゃないが、今の現象はあまりにも超常的。というか、こんなタイミングで俺たちだけ被害無く済むなんて――

「――出来過ぎじゃないか?」

こんなの偶然がいくら重なつてもあり得ないだろ？ 将棋をして

いて負けそうになつたから将棋盤をひっくり返したようなそんな感じ。

もし一連の現象が偶然じやないとしたら、

「北郷（さん）？」

「え？ ど、どうしたんだ？」

二人の声で現実に戻された。二人は不思議そうな、何処か不安げな目をしてる。

「いや、難しい顔をされてたので……」

「もしかして罠とか気づいたのか？」

しまつた。またそんな心配をさせてたのか。つていうかそんなに表情に出やすいのか俺？

「あ、ああごめん。少し考え」としてた。速く先に進もう

そう誤魔化した俺に二人は何も聞かなかつた。

「急がないとな」



北郷ら一行が対岸に辿り着いた頃。

木々を失つた兀山の頂上に彼は立つていた。そこなら戦場を合間に無く見渡せるから。

そんな彼だが、その表情は完全に冷め切つていた。むしろ失望の色がにじみ出ている。

彼は観ていた。このちっぽけな戦いを始めから。そして最後まで傍観するつもりだつた。

つまらない。その感情が渦巻いている。

元から期待はさほど無かつた。彼らはこの戦いが始まる時点で義勇軍とは呼べない集まりとなり、その兵も先の戦いで疲弊した体にさらに鞭を打つて働いてる。策略も彼から見たらおざなり極まりない。『ある程度戦える敗残兵』を加えても5倍の数を覆すことなど到底無理な話。案の定、行き当たりバッタリの手を使い、奇跡的にここまでやつてこれてるだけ。

内心に溜まる靄^{もや}のような感情を抑えながら、彼は数キロ先を見下ろ

す。

船の揺れで狂った感覚に戸惑う白い服の少年は赤髪のボーアッシュユな少女が背中に張り手で喝を入れた所為で思いつきり悶絶し、茶髪のサイドテールの少女が目を回しながら少年を介抱している。なんとも緊張感の無い光景。

「……」

あの義勇軍に監視をするほどの価値はあるのか？

それが彼を埋め尽くす疑問の元だ。

先ほどから語っているがあの義勇軍は崖っぷち。将来大物に成ろう人材は居たが、今は居ない。この大陸——この世界を探せばあの程度の勢力などすぐにでも見つかるだろう。

確かに見過ごせないものはあるが、それは彼に与えられた使命とは別の問題だ。

「……」

これ以上の監視は無意味。彼らがここで散つても彼にはあずかり知る所ではない。

そう決めつけて風と共に消えるように立ち去つた。



ふと、数キロ先にある『嵐が吹いた兀山』へ目を向けた。

頂上付近に人が居たような気がしたのだが、視線の彼方には動くものなど無かつた。遠目だつたから単なる見間違いだろう、と結論付けた。

曲がりくねつた谷を通り、林の中の湖でのどを潤し、整備されてない道なき道を足の疲れを我慢して歩いた。

そして桃香の姿が見え、肩の荷が下りたと内心小躍りして桃香と合流した時、ようやく彼女の様子がおかしい事に気づいた。

何処となく落ち着いてない桃香に俺を始め、成政や正勝の顔が曇りだす。どうしたのかを聞いてみると桃香は俯いて、

「……着いて来て」

ただならぬ雰囲気に誰も言葉を出せない。

素直に桃香の背を追う一同は、得体の知れない不安に心臓の鼓動が

速まつていくのを感じる。

少し行くと楼桑村の村人達が地べたに座り込んでは見えたが見え、いよいよもつて悪い予感しか感じなくなってきた。何故かと聞かれたら、楼桑村の人々全員が一様に顔を俯かせて一言も喋らないから。もう、空気が死んでるとしか表現できない感じだ。

と、

暗い空気に飲み込まれかけた時に桃香が立ち止った。連れて来たかつた場所に着いたようだ……？

「ど、桃香？」

思わず上ずつた声と掛ける。きつとこの場に居る桃香以外の全員が戸惑つてはだ。

俺たちの前には桃香以外何も無い。

これは比喩ではない、本当に何も無い。

目の前には桃香の足元を区切りとするように不自然な荒野が広がっていた。

地平線が広がつており、この先は何も無いと語つてるよう。

茫然とする俺たちに追い打ちをかけるように桃香が口を開く。

「……。ここがね、徳然ちゃんが居る村なんだ」

思考が止まつてしまつた。

「何を、言つてるんですか、劉備さん？」

皆の心を代弁するように正勝が恐る恐る聞く。

すると、桃香は覚束ない足取りで道のわきにある木に近寄つて、木製の何かを持つてきた。

「私もね。道に間違えたのかなつて思つたりこの先にあるんじやないかつて思つたりしたんだよ？でも、これを見つけちやつてそんな考えが全部吹き飛んじやつたんだ」

その木製の物体は看板だつた。何故か字が書いてある部分の半分が黒く焦げている。

「この看板の文字、昔私と徳然ちゃんが一緒に書いたものなんだ。忘

れるわけがないよ」

半分しか読めない看板だが、間違いなく自分の字だと桃香は言う。多分彼女が言うことは本当の事だろう。こんなところで悪い冗談をいう娘じゃない。

「待てよ……じゃあ何か？ この先から進めねえってのか！？」

「それより村の人は!? 誰か残つていなかつたんですか!?」

その質問に桃香は応えず、ただ首を横に振るだけだった。

それは援軍は無い、ということ。

前はいつまで続くとわからない荒野。後ろは5倍以上の妖魔の軍隊。

俺たちに逃げ場は、無い。

陣地会話 佐々成政

簡易的な野営地が立つと、今までの喧騒が嘘のように静まり返った。

長距離の移動という慣れない運動ですっかり寝入つてゐる……ことはないだろう。

何せ彼らの運命は明日で終わるかもしれない。そんな時に寝れる奴なんてよほどの大物か、神経が図太いただの阿保のどちらか。

そんな静寂の中を一刀は立つていた。

何か目的があるわけでもなく、目の前の変わらない景色を見ている。だが湖畔に浮かぶ白鳥のように、その脳裏はあらゆる考え方で埋め尽くされていた。

（成政が言うには早くても明日。良い方に見積もつても夜明けにはここまで辿り着く。500の妖魔が、俺たちを殺しに来る）

確定した未来。

反抗しても無駄に時間を延ばすだけ。

（今すぐ逃げないと追いつかれるだろうけど、皆、焦燥しきつてるしな。俺がごちやごちや言つてもストレスが溜まるだけだ。それに逃げ場所なんて……）

身を守る武器を奪われ、希望をへし折られ、盤上の隅まで追い詰められ。すでに抵抗すら考えられないほど疲れきっている。この静寂の中に聞こえる誰かの嗚咽は明日の不安の表れ――。

「使い様？ どうしたんですか？」

声に反応して顔を上げると川並衆の女棟梁さんが居た。

「やあ蜂須賀さん。……ちょっと考え事をね」

炊き出しの手伝いをした後、各自自由行動を取つていたのだが、彼女たちのグループの姿が無かつたので一刀は内心心配してたのだ。

「蜂須賀さんは何をしてたんだ？」

「え？ 備品の整備をしてましたけど……」

「一番大変だったのは川並衆の人達だから、しつかり休まないと」

「船頭の人達には休みを与えてますので、今動いてるのは主に誘導の人達です。私は頭かしらなのでそう休んでいられませんから！」

むんつ、と腕を振り上げ元気を示す正勝。空元氣だというのは明らかなのだが、彼女もまた棟染。弱音なんて言えないのだ。そんな健気な姿にほころんでしまう。

「そうだ。さつき佐々様が御使い様を探してましたけど、まだ会つてないですよね？」

と、思い出したように一刀に伝える正勝。一体なんだろう?と一刀は思つて、やはり首を傾げる。一通りの作業も終わつたし、成政に呼ばれる心当たりが全く無い。

「ホントか? 何処に居るか知つてるかい?」

「さつきは劉備さんと一緒に居ましたよ」

◆
正勝に軽く礼を言つて、指定場所へ向かつた。

正勝が見たという劉備の所には既に居らず、あちこち巡つて街道と荒野の境界線へ辿り着く一刀。

何故そつちに足が向いたのかは自分でもわからないが、目的の人物と見慣れた少女に会うことが出来た。

「桃香?」

「あ、ごしゅじ」

「遅い!」

劉備の言葉を遮つて吼える成政だが、そこまで怒つてないようだ。何となくノリで言つてるとと思う一刀。ただ遮られてしまつた劉備は次の言葉が出てこず、視線を右往左往させていた。

大きく傾いた日が一刀達を赤く照らす。

樓桑村の人々がいる簡易的な陣営も、一刀達も、荒野の果てまで赤く紅く染まつてゐる。

「……どこまで続いてるんだろうね」

ポツリと。

劉備の呴きが酷く耳に残る。

一刀も成政も、その独り言の答えを持ち合わせてない。

この突然現れた『境界』。

いや、突然ではなく、地震が起きてからずつとこの荒野との境になっていたのかもしれない。

地震が発生した後に出来ただろうこれは、土地の環境すら区切つてるらしい。試しに荒野に入ると突然砂埃と乾燥した空気が襲い掛かってきて、林に戻ると樹林地特有の匂いが喉を癒した。妖魔軍討伐のため諸国を廻った成政がいうには、夏のような暑さだったのに1里先では雪が降つてた場所もあつたそうだ。そんな摩訶不思議な境界線。

境界の先に広がる荒野に果ては見えず、ただ地平線があるだけ。この先、地平線の向こうに何があるのかわからない。

一体この境界は何処と繋がつてしまつたんだろう？

頭に浮かんだ疑問に対する答えも、この場に居る誰もが知ることはできない。

しばし沈黙が生まれた

「そうだ」

静寂わかなかを破つたのはまたしても劉備だった。
「和奏ちゃんのこと教えて？」

「は？」

「ずっと聞きたかったんだけど、色々あつたから聞きそびれちゃつてたしね。和奏ちゃんのこと、もつと知りたいんだ」

「あ、えっと……（どうすりやいいんだこれ？）」

成政は劉備の屈託のない笑みにたじろぎ、一刀に視線で助けを求める。

が、一刀も成政のことをもつと知りたいし、劉備の押しの強さは一刀がどうにか出来るものじゃないと思うので、

「（素直に応えてあげなさい）」

とアイコンタクトを返しておく。通じるかわからないが。



「じゃあ、これまであつた事を言うぞ。最初にボクらが妖魔の存在を知つたのは三河からの報せを受けたからなんだ」

教えて教えて、としきりにせがむ劉備に折れた成政は語り始めた。

「三河つてお団子が美味しかつた所！」

「お団子つて……まあいいや。三河の殿さまは久遠様——織田信長さまと同盟を築いてるんだ。けど地震が起きた半月後、三河から先触れが来た」

遠くを眺めながら当時を振り返る成政。

当時、原因不明の地震で領地の方々に被害が及んでおり、成政を始め、織田家臣総出で問題消化に当たっていた。ようやく倒壊した建物の普請に着工しようとしたおり、三河の伝令が城へ走り抜けていく姿を見た。

ただならぬ様子に彼女は同僚らと共に城へ趣き、そして事の重大さを知ったのだつた。

「三河を攻めてきた異形の集団、それに対抗して三河周囲から豪族を集おうとしたら僅かを残して消えていた——完全に陸の孤島になつてたんだ」

「……その、消えた豪族さんたちは？」

「わからんねえ。たまたま尾張の領地にいた奴ら以外見つかなかつたし、連中の居所を廻つたけどこの荒野みてえに荒野に置き換わつてた。……殿は急いで三河に兵を向けて、その時は何とか妖魔共を撃退できたんだ。けど——」

それが何度も続いたのか。

疲弊する民に消耗する物資。終わらぬ襲撃は彼らに多大な被害を及ぼしたのだろう。

それは苦々しい表情の成政を見てれば一刀達も理解できる。

「そいつた襲撃が何度も続いて、ついに久遠様は妖魔に反撃することを決断された！ 消極的な豪族たちに妖魔の危険性を説き廻つて、残つた戦力をかき集めていつたんだ」

不意に、誇らしげに。ちよつと大げさな手振りをしながら。

「久遠様の呼びかけに多くの豪族たちが応えてくれた。敵だつた美濃の斎藤龍興も少ねえけど兵を出してくれた。妖魔軍を蹴散らすたび

に周りからの援助も増えてきて、すつげえ嬉しかった！ 尾張武士は弱卒、なんて悪口言われてたけど、久遠様の采配を前にして言つてた奴ら何も言えなかつたんだぜっ？」

まるで自分の手柄のように、成政は胸を張つて語つた。

一刀が知る歴史での織田信長という人物は、悪逆非道・敵に対しても慈悲で時には自分の民すら殺す、という魔王のような男。それが一般的なイメージだが、それは誇張されてる上に織田信長の側面の一つに過ぎない。

彼が生きた時代にしては先進的で、合理的。当時、絶対の権力を有していた室町幕府を滅ぼし、畿内を中心に強力な織田政権を確立。戦国時代の終結に最大の影響を与えた人物である。

が、彼の思想は古きを重んじる者達から疎まれ、多くの敵を作つた。

「立派な人なんだね織田さん」

劉備の咳きに一刀は確かに、と思つた。

そして、一度実際に会つてみたい、という思いが二人に生まれた。劉備は純粋に凄いから見てみたいという興味で、一刀はこの世界の織田信長はどんな人なのか知りたかったから。

「妖魔共を蹴散らしていつて、妖魔を指揮してる奴の根城まで追い詰めた。……けど、妖魔に仕掛ける直前に——裏切られた」

先ほどのテンションが嘘のように、成政は顔を伏せた。

「松永久秀……あいつは裏で妖魔と繋がつてやがつたんだ」

成政の方が震える。ふと目線を落とすと彼女の拳は変色するほど強く握られてる。

それが怒りの表れであることは一目でわかり、

「いざ決戦つて時にあいつが久遠様に刀を突きつけて。助けようとした時に妖魔が陣地に攻めてきて。そうこうしてるうちにあつという間にバラバラになつちまつて。……ボクの手下以外誰も居なくなつた」

「和奏ちゃん……」

「後は知つてのとおり、必死に逃げ回つて楼桑村に逃げ込んだわけだ。……今更だけど、ワリイな。厄介ごと持つて来ちまつて——」

「大丈夫だよ和奏ちゃん」

「え？」

劉備が不意にそんな言葉を掛けた。

「和奏ちゃんがこうやつて生きていたんだもの。——だから大丈夫。きっと皆も生きてる。それに迷惑だなんて思つてないよ？ 和奏ちゃんが楼桑村に来てくれなかつたら、何も知らないまま妖魔たちに蹂躪されてたかもしれない。和奏ちゃんが来てくれたから、私たちは生きてるんだから」

何か言いたげな成政に有無を言わせないようにまくし立てる。

「和奏ちゃんが私たちを助けてくれた。……だからさ！ この戦が終わつたら、今度は私たちが和奏ちゃんを助ける番だよ！」
ぎゅつ、と。

成政の手を取つて劉備は言い放つ。

その言葉を受けた成政は呆気にとられた顔をした。

退路を失い戦力が充実していない今後に及んでも、彼女はまだ『この次』を信じていたのだから。

彼女の言葉は楽観的。かつ短絡的なことばかりのことを並べられているが、それは彼女が一番欲しかった言葉。

成政は劉備の目を見る。

彼女の碧眼は成政をしつかりと捉え、微動だにしない。

(綺麗な目……)

見入つてしまいそうな純粹さを秘めた瞳は、まるで心内を見透かしてるように、成政はつい目を逸らしてしまつた。

「和奏ちゃん？」

不安そうな声がかけられる。不意に目を逸らしたから、何か傷つけるようなことを言つたのだろうかと勘違いしてゐるのだろうか。

「なあ桃香——」

成政は劉備に何か言おうとして、やめた。

何を言おうとしたのかは劉備も一刀もよくわからない。が、ほじくり返してもしようがない事だと思つた。

「そういえば」

不意に、二人の様子を見守っていた一刀が成政に尋ねた。

「成政はなんで俺を探してたんだ？」

「北郷をつていうか、桃香も探してたんだ実は」

「それで、用件はなんだつたんだ？」

「……それはもう良いや。ありがとな」

成政はそう言うや否や走り去ってしまった。黒母衣衆の長としての作業に戻ったのだろう。

「……」

「どうしたのござ主人様？」

「ああいや、大したことじやないんだけどさ、結局何が言いたかつたんだろうって」

一刀は最後、彼女が少し考え込んで言い淀んだのが気になつた。自分に用があつたと言つていたが、それを引きずるのは良くないと思ひ、何氣なしに桃香に口ずさんでいた。

「大丈夫だよござ主人様」

一方の桃香は微笑みながら断言した。

「多分私と話してゐる内に自分で納得しちやつたんじやないかな。だから私たちがどうこう言わなくとも自分で答えを見つけてる、と思う」

それに、と付け足し、

「和奏ちゃんつて案外気弱なところがあるみたいだし、私たちに話を聞いてもらつて整理を付けたかったんじゃないかな？……まあ、全部私の推測だけどね」

そう言つて劉備は苦笑交じりの笑みを浮かべる。

対して、それを聞いた一刀は呆けた表情。

「やっぱ桃香はすごいな」

「な、何が？」

一刀の賛辞に狼狽えた様子の劉備。一刀の言つてることがよくわからずパチクリと目を瞬かせる。

「人心掌握、つていうのかな。俺が佐々さんに何か言つてもきつと伝わらなかつたと思う。けど、桃香が語つたらスッと胸に沁みこむ感じがするよ。佐々さんと出会つてまだ日も経つてないのにどういう人か理解出来た桃香だからこそ『この劉備』と言えたんじやないか？」

正直、本人は無自覚だろうが、彼女は一刀が知る『劉備玄徳』の才を發揮している。

相手がどういう思いなのかを敏感に察知し、どうしてあげれば相手は慰められるかを思いやる気遣いがある。彼女の言動には人を安心させる何らかの力を感じるのだ。

「……そう、かな」

不意に聞こえた消えるような返事。

彼女のらしくない様子に一刀は桃香？ と劉備を見る。が、何故か劉備は俯いて、彼女の暖かさを感じる桃色の髪が顔を隠し、顔色は窺えなかつた。



一刀らから少し離れた所で、成政は自分の脇差を抜いてその白刃を見る。

「……『言えねえよなあ……怖い、なんて……』

刃に映る自身の顔から眼をそらさない。自分の心に語り掛けて、自分の為すべきことを見つめなおす。

ふと思いつ返すのは妖魔討伐の直前の頃の記憶。

『和奏ちゃん！』

『ちょっと刀交換しよ！』

『じゃあ、雛ひなのわんこも犬子わんこちんとこうかくん』

『うん！ 良いよ！ ——え？ どうしてこんなことするのかつて？』

『相手は妖魔だからね。もし敗けちゃつたら雛たち食べられちゃうかも』

『……うくん。壬月みつきさま達も居るからそんな事ありえないと思うけどかも』

……まあとにかく験^{げん}ぎだよ。刀を返しに来るまで生きていよう
ね、つてね』

——そう約束した彼女達とはもうどのくらい会つていないので
ろうか?

「桃香も一刀も諦めてないんだ。ボクも諦められるか!」

不安はある。

夜が明けたら自分たちはどうなつてるか見当もつかない。
けど、劉備は次が来ると信じていた。

妖魔を引き連れて巻き込んだ自分を信頼してくれた。
だつたら——全力を尽くすしかないだろう。

自分にはまだやり残したことがたくさんあるんだ!

チンツ! と刃を鞘に納め、成政は前を見据えると決めた。

陣地会話 蜂須賀正勝

——日が完全に落ち切った頃。

一刀は驚いた。この予想外の暗さに。

上を見上げれば月と星々が光を放っているが、林の中ということもあつてか、たき火や篝火かがりびの明かりが照らす場所以外はほとんど真っ暗だ。現代日本の深夜でも明るい街並みに慣れた一刀には新鮮に感じる光景だった。

何が言いたいかと云うと。

こんな暗さでも篝火も付けずにがさごそと作業してゐるシルエットがひじょくに気になつてしまふのだ。

(……泥棒……なわけないよな。火事場泥棒でも切羽詰まつた状況でそんなことする意味ないし、こんなどこまで泥棒に来る奴なんていいしな)

よく見ればそのシルエットは一人ではなく十数人も居る。

(もしかして夜逃げ? ……あり得る。誰でも自分の命が大事だし)

一刀はそう結論付けて、どうしようかと悩んだ。

元々楼桑村から無理やり連れてきた手前、逃げた先が行き止まりで逃げれません妖魔に食べられるだけですと言われて納得できるわけがない。その上勝手に逃げないでと引き留めるのも間違つてる気がする。けど何も言わずに消えられるのはこちらとしても後味が悪いものだ。

「一応話を聞いてみようか」

桃香とうかは居ないけど、話を聞いてから引き止めるか見送るかを決めよう。そう考えて一刀はシルエットに近づいた。

「お、と声を掛けるとビヨコンツとサイドテールのシルエットが跳ねた。……そのサイドテールの持ち主を一刀は一人しか知らない。『み、御遣い様?』

「やあ、蜂須賀さん。こんな暗がりで何してるんだ？」

一刀は緊張させないようにフランクに話しかけたが、当の彼女は何が落ち着かないのか目を回していた。

と、それよりも、

「御使い様つて何だ？」

何か呼び方が変わっている。

「あつ、えと、その……」

語尾がだんだんとか細くなる正勝。そんな彼女を遠巻きに見てる川並衆の面々はお頭を困らせんじやねー的な視線を一刀に送つていた。

「先の撤退の際に強風が吹いたじやないですか？ 実はあの風は御使い様が起こした奇跡なんぢやないかっていう話が川並衆の一部で囁かれていて……現実的にありえないってわかってるんですけど、御遣い様の服も見たことが無い素材で出来てますし、凄いお力持つていてもおかしくないって言う人も出てますからね。それに御遣い様は義勇軍の長である劉備さんより偉い方ですから敬意を払わないといけないと思つたんですけど……迷惑でしたか？」

悪戯がバレた子供のように上目使いで怯えるように告げた。

正勝の説明を聞いた一刀は……手を額に当てた。

確かに自分は『流星に乗つて地上に降りた救世主』という触れ込みの天の御遣いを名乗つていて、この学生服もポリエスチルというこの時代では製造不可の素材であるし、この時代（世界？）の人達から見たら超常的な存在と観られているだろう。

だからあの不自然な突風が一刀と結びつかることは何となく理解できる。

が、しかし何だろうか。この黒歴史を勝手に作られてるようなスッキリしない感じは。

そんなことを思いつつ、一刀はそれらのことを放り出すことにすら。自ら天の御遣いと名乗つておきながら、下手に否定して周囲に疑心を持たせるわけにはいかないので。決して面倒だから、ではない。

「そんな仰々しい呼び方じゃなくても良いんだけど。普通に名前で呼んでくれるとこっちとしても気が楽だからさ」「そそそそんなの恐れ多くて出来ませんよう！」

ブンブンブンブンっ！ 首を横に振りまくるとする正勝。その彼女の背後に居る川並衆の皆さんとの視線がどんどん強くなるのを感じる。どうしろと。



「お～終わつたか～……って、何やつてんだ？」

いつの間にか来ていた成政の若干疲れが入った気の抜けた声でようやく正勝の動作が止まつた。

一刀への注意が成政に向けられホツと一息ついた。

「お疲れ様です佐々様」

「ああ、お疲れ佐々さん」

軽く挨拶を交わし、

「お疲れさん……で？ なに遊んでたんだ？」

「す、すいません！」

「遊んでたわけじやないんだけどな……」

そう反論しても成政は三角形に尖らせた目を和らげない。

彼女の剣呑さを感じ取つた一刀は当初の目的を思い出して二人に尋ねた。

「佐々様に頼まれて矢とか竹槍を作つてました」

「明日何をするにせよ必要になつてくると思つてさ、作らせてたんだよ。いくらあつても足りないからな」

なるほど、と一刀は頷く。

元から楼桑村には物資が足りてなかつたため、先の撤退戦で使われた弓矢はもう残されていない。更に、成政が持つてきた鉄砲。これは絶対数が少ない上、火薬も貴重——というか、戦国勢しか所持しない——なので弾と火薬が尽きてしまえばただの鉄の筒になる。故に弓矢と槍などの距離を置いた武器が必要だつた。幸いここには矢の材料となる竹材はすぐに調達できるし、竹を切つただけでも十分に武器の代わりになる。

「御使い様は様子を見に来たんですか？」

「見に来たと言うかたまたま見かけたって言うか……あと名前で呼んで良いからな」

「無理です！」

むくりと拒否する正勝に對してだんだんへこみそうだ。これはもう諦めた方が良いか……。

と思つてたら思わぬ所から助け船（？）が渡された。

「そういうやお前ら何でボクを通称で呼ばないんだ？」

筆頭さんの借問に一刀は目が点になる。

一刀にとつて通称は真名と同じようなもの、だからある程度親しくないと呼んじやいけない、と解釈してゐる。だからやたら無暗に口に出すことを避けていたのだが……。

そう伝えると成政は、

「別に良いぜ。つーか一番最初に名乗つてただろ？ 北郷は桃香と同じ義勇軍の長だし、川並のお前だつて助けてもらつてるしな。ボクは通称で呼ばれても良いつて思つてるからさ。……ボクは呼ばれても斬りかかつたりしないぞ？」

歯を見せながら悪戯っぽく笑つた。

成政にここまで言わせて通称呼びを断る道理はない。自分のことを認めてくれた成政のお願いを断るほど甲斐性のない男ではないのだ。

成政の笑みに応えるように一刀も微笑みながら手を差し出した。

「ああわかつた。改めて、よろしくな——和奏」

一方、手を差し出された成政は目を丸くしていたが、その意図はわからずとも何と無く一刀の手を取つた。

「よろしくな一刀！」



互いに名を呼び認め合う関係になつた二人は、合わせることなく同時に残されていた正勝に期待の目を向ける。当の正勝は猛獸に睨まれた小動物のように体をビクつかせた。

——やがて、諦めたように頭かぶりを振つた。

「わかりましたよう……お一人も私のことを転子ころこって呼んでくださいね」

いえーい、とハイタツする一刀と成政に正勝はもう何もかも放り出したい気分になった。

そんなこんなの一幕があつた後、正勝は武器作りの作業に戻り、成政はその監督、一刀は正勝の力になれるように手伝いを申し出た（正勝はこの時恐れ多いと以下略）。

渡された小刀で竹を削る作業は思いのほか難しかつた。カツタ一で鉛筆を削る感覚でやつてみたが、木の節が固くて危うく指を切り落としけ、出来たと思って正勝に見せたが真っ直ぐに飛ばないと言われて削り直し。

せつからく申し出たのに結果が人並み以下というのはよろしくない。そもそもこの暗がりじや手元も見えないからとても不便だ……と考えて一刀はふと思いついた。

不意に立ち上がりつてごそごそと服をまさぐる一刀を尻目に、正勝らは一心不乱に矢を整えていく。本来必要な製作過程をすつ飛ばして作つた即席の矢はあまり良質とは言えないが、あつても困らないだろう。それに、こうして地味な作業を行なうのは意外と正勝の精神を落ち着かせることが出来た。明日に迎えるだろう己の運命はやはり不安で仕方がない。だから目の前の事に集中して少しでも余計なことを頭から排除したかつた。

黙々と手を動かす川並衆（と矢を1本1本籠に入れて数える几帳面な黒母衣衆の筆頭さん）。

そんな時、彼女たちの集中を乱す出来事が起きる。

目を凝らして手元を見ていた正勝。

彼女の視界が一瞬にして白く塗りつぶされた。

「…………!?」

原因は小刀に反射した螢光。だが今まで感じたことの無い強烈な照度が正勝の網膜を刺激した。

混乱のあまり声にならない悲鳴を上げ、つい手に持っていた小刀を放つて、

「え？　えうおあああああああああ！」

ひゅんっ！と顔の横すれすれに飛んできた小刀を避けた成政は、その拍子に矢を踏んづけて盛大に転んだ。さらに持っていた籠が宙を舞い、

「うおつ!?」

「あぶね!!」

反応が遅れた川並衆の厳つい荒くれ者に矢が降り注ぐ。さらにさらにほんわかとした声が近づいてくる。

「和奏ちゃん手伝いに来たよ～」

暗闇から矢が降り注いでるのに全く気付かず、手を振つて成政達の元へ歩いてくる劉備。

矢は当たるか当たらないかの軌道を描いて劉備以外のものに被害をもたらす。

力つ、と最後の一本が劉備の背後の地面に刺さった音がした。

「目がく！」と未だに混乱して正勝。

自身が起こしたミラクルでどんでもないことが起きたのを理解してあわわわわとわななく成政。

何で皆が慌てているのかわからずにこやかながらも頭に疑問符を浮かべる劉備。

この大参事を目の当たりにした一刀は発光元のケータイ電話を片手に茫然と立ち尽くすしかなかつたのであつた。

落ち無し。